

日本動物学会九州支部(第66回)
九州沖縄植物学会(第63回)
日本生態学会九州地区会(第58回)
合同熊本大会プログラム

【日程】

5月18日(土)

- 11:00~11:30 動物学会九州支部・九州沖縄植物学会委員会
- 11:30~12:00 生態学会九州地区委員会
- 12:00~ 受付, ポスター掲示
- 13:00~14:00 合同ポスター発表(奇数番号発表)
- 14:00~15:00 合同ポスター発表(偶数番号発表)
- 15:10~15:40 動物学会九州支部・九州沖縄植物学会総会
- 15:40~16:10 生態学会九州地区総会
- 16:20~17:50 特別公開講演
- 18:00~20:00 懇親会(熊本大学くすの木会館)

5月19日(日)

- 8:30~ 受付
- 9:00~12:00 一般口頭発表(動物学会)
- 9:00~12:00 一般口頭発表(植物学会)
- 9:00~11:45 一般口頭発表(生態学会)

【会場】

熊本大学 黒髪南地区キャンパス 理学部2号館、3号館、および工学部1号館
(〒860-8555 熊本市中央区黒髪2丁目39-1)

5月18日(土)

- (1) 委員会会場:
 - 動物学会 理学部2号館1階 C122 (一般口頭発表A会場)
 - 植物学会 理学部2号館2階 C226 (一般口頭発表B会場)
 - 生態学会 理学部2号館2階 C227 (一般口頭発表C会場)
- (2) 総会:
 - A会場(動物学会) 理学部2号館1階 C122
 - B会場(植物学会) 理学部2号館2階 C226
 - C会場(生態学会) 理学部2号館2階 C227
- (3) 合同ポスター発表:
 - ポスター会場(P会場) 工学部1号館2階 共用B会議室
- (4) 特別公開講演: 理学部3号館2階 D201
- (5) 休憩室: 理学部2号館2階 C228
- (6) クローク・大会本部: 理学部2号館1階 C123
- (7) 受付: 理学部2号館1階 玄関ロビー

5月19日（日）

一般口頭発表:

A会場（動物学会） 理学部2号館1階 C122

B会場（植物学会） 理学部2号館2階 C226

C会場（生態学会） 理学部2号館2階 C227

(5) 休憩室: 理学部2号館2階 C228

(6) クローク・大会本部: 理学部2号館1階 C123

(7) 受付: 理学部2号館1階玄関ロビー

※ 熊本大学キャンパス内は所定の場所を除いて禁煙となっています。ご協力をお願いします。

【受付】

- (1) 受付は、18日（土）12時00分から17時00分まで理学部2号館1階玄関ロビー内におきます。受付では、名札等をお受け取りください。会場では、名札の着用をお願いします。
- (2) 当日参加の方は、参加費（一般4,000円、学生2,000円）を受付で納入してください。なお、懇親会に当日参加される方は、懇親会費（一般4,000円、学生2,000円）を納入してください。
- (3) 講演要旨集は一部1,000円です。必要な方は、受付でお求めください。

【講演】

1. 一般講演はポスター発表（三学会合同）と口頭発表（各学会）で行います。
2. ポスター用ボードのサイズは縦180cm×横120cmです。18日（土）のポスター発表では、原則として、奇数番号は13:00～14:00、偶数番号は14:00～15:00にポスターの前での説明を行って頂きます。
3. 19日（日）の口頭発表の時間は、質疑応答を含めて15分間です。終了時刻の5分前に1鈴、3分前に2鈴、終了時に3鈴を鳴らします。時間厳守をお願いします。
4. 口頭発表は、パソコン用液晶プロジェクターを用いて行います。発表用パソコンを各自ご持参下さい。Apple製品等、特殊な接続ケーブルが必要な場合、各自でご持参下さい。
5. 口頭発表が終わった方には次の発表の座長をして頂きますので、よろしくお願ひ致します。

※ 会場で液晶プロジェクターにパソコンをつなぐ場合、以下の手順をお願いします。

- 1) 1会場に1台配置した液晶プロジェクターには、切り替え器の2本の入力ポート（メスD-Sub15ピン）を使って、演者と次演者の2台のパソコンをつなぎます。
- 2) 次演者は専用席に座り、パソコンをポートに接続し、パワーポイント等の発表データを開けた状態で待機します。
- 3) 前演者の講演が終わったら、発表者自身で切り替えスイッチを切り替えて下さい。試写用の液晶プロジェクターを大会本部に設置しますので、事前の動作確認等にご利用ください。

【クローク】

クロークは以下の時間帯に利用可能です。

19日（土） 12:00～18:00

20日（日） 8:30～12:30

荷物の引き取りは、必ず時間内をお願いします。なお、建物内にはオートロックにより、所定の入口以外からは入れなくなりますので、ご注意ください。

【懇親会】

懇親会は、5月18日(土)18:00より、熊本大学くすの木会館レセプションルームにて行います。

【昼食】

大学構内の食堂は、18日(土)は11:30から14:00まで黒髪北地区の学生会館食堂がご利用できます。19日(日)は営業していませんのでご注意ください。なお、近くにコンビニエンスストアや飲食店などがあります。

【会場までの交通案内】

熊本大学への交通アクセスについては、次のような方法があります。

JR熊本駅から：産交バス・楠団地, 武蔵ヶ丘等(子飼橋経由)「立田自然公園入口」下車
都市バス・第一環状線[駅2](大学病院・大江渡鹿経由)「子飼橋」下車徒歩10分
交通センター(13番のりば)から：産交バス・大津, 武蔵ヶ丘, 光の森等(子飼橋経由)：電鉄バス・楠, 武蔵ヶ丘
いずれも「立田自然公園入口」下車
JR竜田口駅から：産交バス・交通センター, 田崎橋, 西武車庫：電鉄バス・交通センター
いずれも「立田自然公園入口」下車

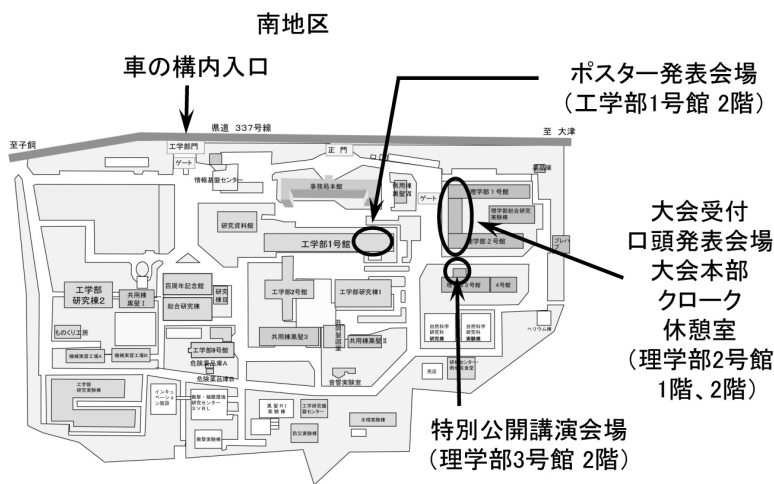
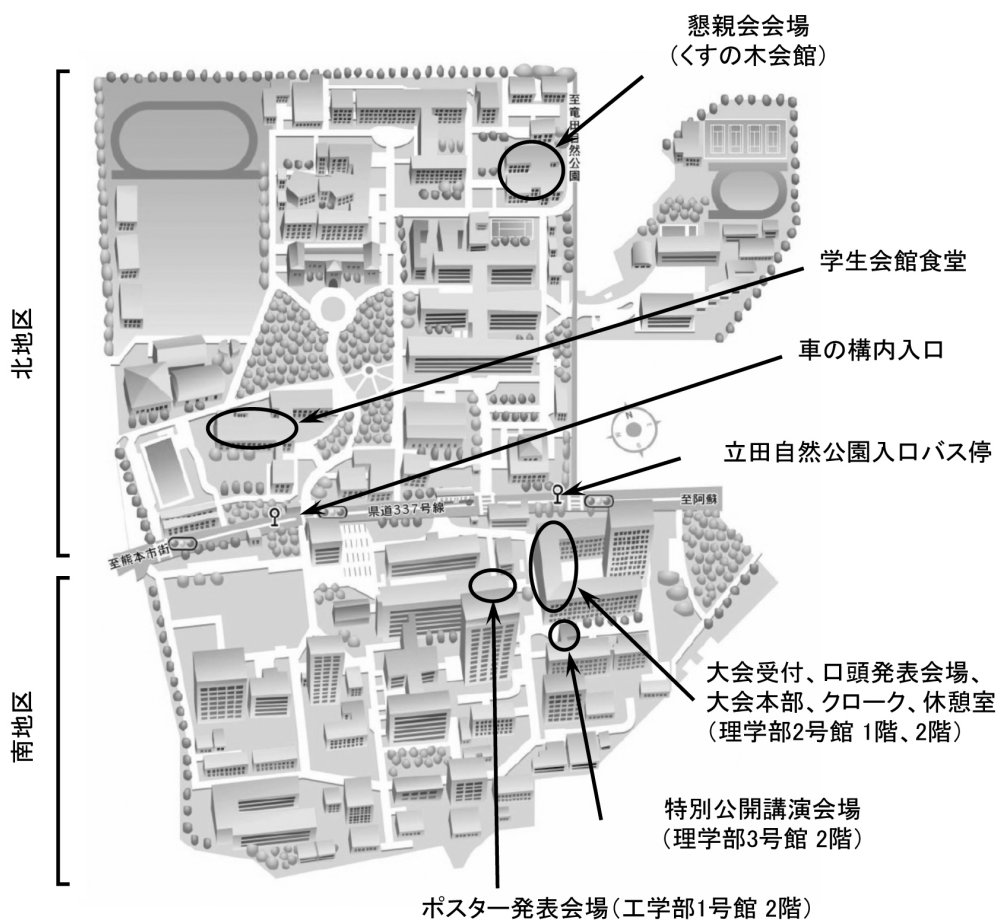
【自家用車をご利用の方】

「大会会場(熊本大学黒髪キャンパス)案内図」に示しました「車の構内入口」からお入り下さい。駐車場は、会場近くにもあります。

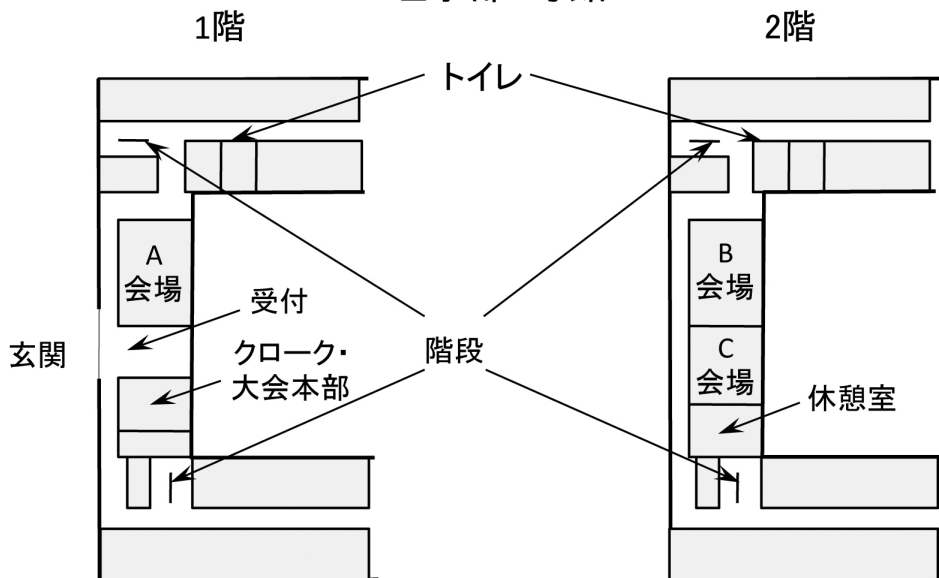
【宿泊】

宿泊に関しましては、特に斡旋はいたしません。

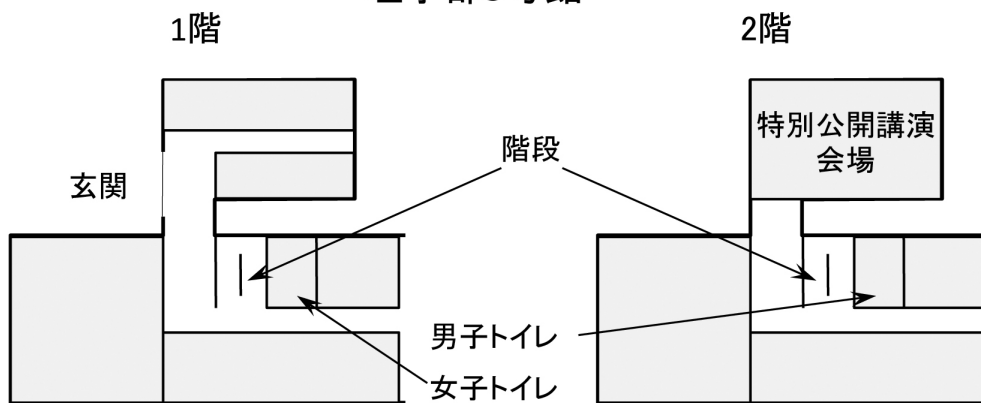
大会会場(熊本大学黒髪キャンパス) 案内図



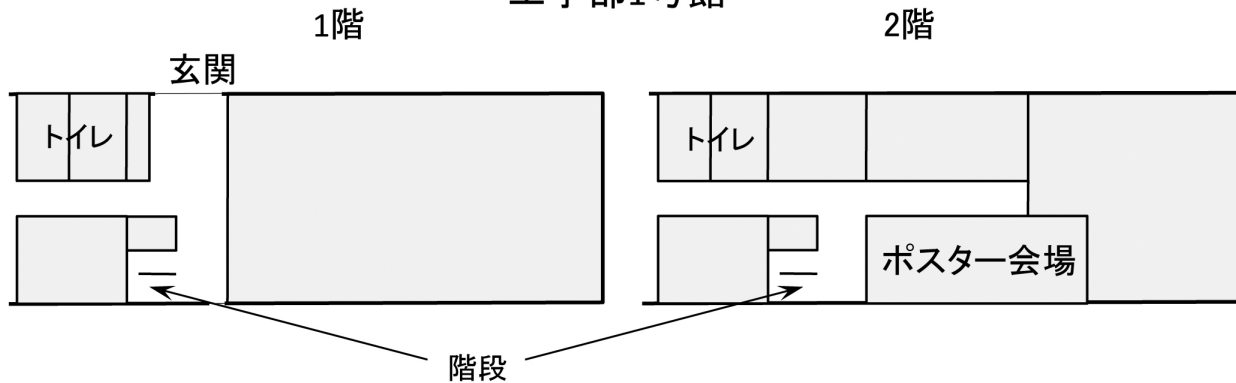
理学部2号館



理学部3号館



工学部1号館



1日目 5月18日(土)

合同ポスター発表(奇数番号) 13:00～14:00

合同ポスター発表(偶数番号) 14:00～15:00

場所: 工学部1号館2階 共用B会議室 (P会場)

特別公開講演 16:20～17:50

場 所:理学部3号館2階 D201

講演者: 杉浦 直人 氏 (熊本大・院・自然科学)

瀬井 純雄 氏 (NPO法人 阿蘇花野協会)

2日目 5月19日(日)

一般口頭発表 9:00～12:00

場 所: A会場 (動物学会) 理学部2号館1階 C122

B会場 (植物学会) 理学部2号館2階 C226

C会場 (生態学会) 理学部2号館2階 C227

1日目 合同ポスター発表

奇数番号 5月18日(土) 13:00~14:00

偶数番号 5月18日(土) 14:00~15:00

工学部1号館2階 共用B会議室(P会場)

- P01 *中原仁¹・武智克彰¹・滝尾進^{1,2}・高野博嘉¹(¹熊大・自然科学、²熊大・沿岸域). ヒメツリガネゴケ *PpLrgB* 遺伝子破壊ラインにおける細胞の屈曲とコロニーサイズの減少を相補するシロイヌナズナ細胞死関連遺伝子 *AtLrgB*
- P02 *山本直也・永田真紀・有馬進・鈴木章弘(佐賀大・農). ミヤコグサでの菌根菌共生における光質の影響
- P03 *田川一希(九大・シス生). ナガバノイシモチソウの花と捕虫葉で生じる訪問昆虫をめぐるコンフリクト
- P04 *藍浩之・宮本奈央・山本千尋・山下俊也(福岡大・理・地球圏科学). 匂い学習と学習した匂いにより誘発される歩行様式の季節比較
- P05 *山下俊也・伊東綱男・藍浩之(福大・理・地球圏科学). ミツバチの学習した匂いによって誘発される匂い源探索歩行に対する尻振りダンス音の影響
- P06 *坂田拓司(千原台高)・岩本俊孝(宮崎大教育)・馬場稔(北九州自然史・歴史博物館). 九州山地のカモシカの生息状況―絶滅の危機に瀕する特別天然記念物―
- P07 *瀧下雅幸・*宮本純花・*梶原瑞希・*佐原里桜・高橋翔吾・宮ヶ野直樹・木村南海・中垣優人(熊本県立荒尾高等学校理科部) 指導教諭 菊池栄人・小山文子・松浦弘. 荒尾市周辺地域におけるカスミサンショウウオについての研究
- P08 *安田雅俊・八代田千鶴(森林総研九州)・栗原智昭(MUZINA Press). 九州において絶滅のおそれのあるニホンカモシカを自動撮影カメラで調査する
- P09 *福田誠・浦本達也・大山賢也・田中寿幸(苓洋高校) 指導教諭 佐々木静子・藤木寿益枝. 江理海岸潮間帯岩礁に生息する巻き貝類の殻の断熱能力について
- P10 *森敬介・鈴木孝男・多留聖典・海上智央・柚原剛・榎本輝樹・富田宏・坂田直彦・伊藤詩織・豊西敬・保科圭祐・村松大吾・上野綾子・福井美乃・山本智子・つる祥子・坂井雄志・中川純一・中山邦夫・中山七海・中山頼行・野田美智子・平山信夫・穂田昭徳・溝口隼平・満田隆二・和田太一・佐々木美貴・中川雅博(WJ 八代海干潟調査隊). 「干潟生物の市民調査」手法による八代海のベントス調査
- P11 *栗屋大志・藤本仁敏・平野力斗・田邊亮太(東稜高校) 指導教諭 田畑清霧. 飛翔時にシロテンハナムグリの体温はどう変化するか
- P12 *上野綾子(鹿大・水産). 干潟の底生動物に関する分布調査法の検討:ライン調査法と区画分け調査法

- P13 *江川昂弘(鹿大・水産). 松元ダムにおけるオオクチバスの簡易駆除方法の検討
- P14 *市川敏夫¹・坂本裕文²・藤義博¹(¹九大・院理・生物、²九大・院システム生命). ゴミムシダマシの脛節に存在する新規な弾性器官の形態と機能
- P15 *藤田立信(九大・院システム生命)・市川敏夫(九大・院理・生物科学). カブトムシの爪に分布する機械感覚子の機能の行動学的解析
- P16 *高木啓吾(九州大・院システム生命)・山脇兆史(九州大・院理・生物科学). カマキリ前胸神経節における運動ニューロンの細胞体地図の作成
- P17 *Carle T.^{1,2}・Watanabe H.²・Yamawaki Y.¹・Yokohari F.² (¹ Dept. of Biol, Fac. of Sci, Kyushu Univ.; ² Div. of Biol, Dept. of Earth Sys. Sci, Fukuoka Univ.). Mantis Olfaction. II – A new methodology highlights the antennal development and its sexual dimorphism in praying mantis (*Tenodera aridifolia*)
- P18 *穴井力・江頭恒(熊大・自然科学). タンパク質リン酸化酵素 DYRK1A によるアポトーシス誘導機構の解明
- P19 *丸塚真佐希・生塩文子・江頭恒(熊大・自然科学). RNA結合タンパク質RBM3の局在が細胞の生存かアポトーシスかの運命決定を調節する
- P20 *川口正俊・江頭恒(熊大・自然科学). 翻訳抑制因子 Pdcc4 が細胞のアポトーシス感受性に及ぼす影響

2日目 一般口頭発表

- 5月19日(日) A会場 (動物学会) 理学部2号館1階 C122
B会場 (植物学会) 理学部2号館2階 C226
C会場 (生態学会) 理学部2号館2階 C227

A会場(日本動物学会九州支部)

- 09:00~09:15 A01 近藤篤志・吉元一真(福岡大・理・地球圏科学)・塩路幸生(福岡大・理・化学)・渡邊英博・*横張文男(福岡大・理・地球圏科学). クロオオアリの巣仲間・非巣仲間識別と触角感覚子の応答
- 09:15~09:30 A02 *棕本聖悟・渡邊英博・横張文男(福岡大・理・地球圏科学・生物). ワモンゴキブリ標準脳の実験的作成
- 09:30~09:45 A03 *渡邊英博・下東美樹・横張文男(福岡大・理・地球圏科学・生物). ワモンゴキブリ触角におけるセロトニン陽性の機械感覚細胞の分布
- 09:45~10:00 A04 *甲斐加樹来(福岡大・理・地球圏科学)・池野 英利(兵庫県立大・環境人間)・藍 浩之(福岡大・理・地球圏科学). ミツバチ背側葉における触角振動感受性ニューロンの応答と細胞形態の解析
- 10:00~10:15 A05 *内田裕(九大・システム生命)・山脇兆史(九大・理・生物科学). カマキリの防御か捕獲の意思決定に対する先行視覚刺激の影響
- 10:15~10:30 A06 *山下貴志(九大・システム生命)・Thomas Carle(福大・理・地球圏)・山脇兆史(九大・理・生物科学). 味覚と栄養状態による摂食制御のカマキリにおける性的二型
- 10:30~10:45 A07 *清原貞夫(鹿児島大学)・Thomas E Frger(University of Colorado). 脊椎動物の味覚の起源と進化
- 10:45~11:00 A08 *Elsaid Salaheldeen・Hiroshi Iida (Kyushu Univ, Depart Zool). Heterophilic interaction between CEACAM2-L and PVR on the seminiferous epithelium of mouse testis
- 11:00~11:15 A09 *藤沙織・飯田弘(九州大院・農・動物学). マウスの雄性生殖器における Ceacam10 の発現と局在
- 11:15~11:30 A10 *荒木敦之・金子たかね・飯田弘(九州大院・農・動物学). 生殖細胞の分化に伴うセリン合成酵素(PHGDH)発現の推移について
- 11:30~11:45 A11 *百武慶一郎・宮本健太郎(熊大・自然科学)・河崎敏弘(国立遺伝学研究所)・久保田弘(熊大・衝撃極限環境研)・安部眞一(熊大)・高宗和史(熊大・自然科学). アフリカツメガエル精巣における JAK1 mRNA の発現解析
- 11:45~12:00 A12 *山口智和・高宗和史(熊大・自然科学)・近藤昌和・高橋幸則(水産大・生物)・鶴木陽子・中尾実樹(九大・農学)・藤井保(県立広島大・人間). ヌタウナギ補体系におけるパターン認識分子の同定

B 会場(九州沖縄植物学会)

- 09:00~09:15 B01 角友博・小薄健一・九町健一・阿部美紀子・東四郎・*内海俊樹(鹿児島大・院理工).
ヘモグロビン遺伝子変異したミヤコグサと根粒菌との共生
- 09:15~09:30 B02 *内奈保子¹・重信秀治²・九町健一¹・阿部美紀子¹・東四郎¹・重信秀治²・内海俊樹¹(鹿児島大・院理工,²基礎生物学研究所). 細菌に対するシステインリッチペプチドの活性の検討
- 09:30~09:45 B03 *小薄健一¹・鈴木章弘²・高原皓史¹・蘭正人¹・橋本駿¹・岩崎成美¹・浅見忠男³・九町健一¹・東四郎¹・阿部美紀子¹・内海俊樹¹(鹿児島大・院理工,²佐賀大・農,³東京大・院理). 根粒着生のオートレギュレーションと β -1,3-glucanase
- 09:45~10:00 B04 *永田真紀・山本直也・有馬進・穴井豊昭・鈴木章弘(佐賀大・農). ナス科植物トマトにおける光質による菌根菌感染の制御
- 10:00~10:15 B05 *下村彩¹・宮崎信幸¹・平川英樹²・佐藤修正²・田畑哲之²・有馬進¹・鈴木章弘¹(佐賀大・農,²かずさDNA研). 根への光照射により阻害される根粒着生のメカニズムの研究
- 10:15~10:30 B06 *江島千佳・Bui Thi Ngan(熊大・院・自然)・田畑亮(基生研)・Derek Goto(北大・農)・澤進一郎(熊大・院・自然). 線虫感染過程における植物 CLE ペプチドシグナル伝達系の関与
- 10:30~10:45 B07 *相良知実・江島千佳・Bui Thi Ngan(熊大・院・自然)・田畑亮(基生研)・Derek Goto(北大・農)・澤進一郎(熊大・院・自然). 線虫感染過程におけるセンチュウのエフェクタータンパク質の解析
- 10:45~11:00 B08 *志水法子(熊大・院・自然科学)・木下温子(理研)・田畑亮・重信秀治・長谷部光泰・山口勝司(基生研)・山田昌史(Duke 大)・小林正智・井内聖(理研)・澤進一郎(熊大・院・自然科学). シロイヌナズナを用いた CLE ペプチドシグナル伝達系の解析
- 11:00~11:15 B09 *中西純代・林朋奈・大坪繭子・田村典明(福岡女子大・人間環境). 緑藻クラミドモナス配偶子誘導関連遺伝子の発現に及ぼす cGMP の効果
- 11:15~11:30 B10 *石井優実・畠山真由美・大坪繭子・田村典明(福岡女子大・人間環境). シロイヌナズナ FIB5 ノックアウト植物に光ストレスが与える影響
- 11:30~11:45 B11 *松田修¹・末次憲之¹・内田誠一²・和田正三¹・射場厚¹(九大・院・理・生物,²九大・院・システム情報). 分光画像とパターン認識技術の併用による葉緑体形質の非破壊的判別手法の開発
- 11:45~12:00 B12 *坂本貴彦・西山英孝・光増可奈子(熊大・院・自然)・田口英樹・福田隆文(東工大・院・生命理工)・澤進一郎(熊大・院・自然). 出芽酵母を用いたシロイヌナズナにおける植物プリオンタンパク質のスクリーニング

C 会場(日本生態学会九州地区会)

- 09:00~09:15 C01 *石貫泰三・鈴木英治(鹿大・理工)・木原萌・中原絵理・満琴美・村山奈々美・森園翔梧(鹿大・理工). 鹿児島県薩摩・大隅半島の照葉樹二次林の植生
- 09:15~09:30 C02 *下西聡一郎・鈴木英治(鹿大・理工)・今村文子・山田俊弘(広大・総合科学). 霧島大浪池におけるツガ・アカマツ・モミ林の21年間の植生遷移
- 09:30~09:45 C03 坂田拓司(千原台高)・*天野守哉(熊本県文化企画課博物館プロジェクト班). 熊本県のカモシカ生息地における下層植生の変化—1987年~2012年—
- 09:45~10:00 C04 *船越公威(鹿児島国際大・国際文化)・河合久仁子(北大・北方生物圏フィールド科学センター)・原田正史(大阪市大・院・医学研究科)・荒井秋晴(九州歯科大・総合教育学分野). 大分県で発見されたニホンウサギコウモリ *Plecotus sacrimontis* について
- 10:00~10:15 C05 *中村彩・永野昌博(大分大・教). センサーカメラを用いた大分大学構内の哺乳類相
- 10:15~10:30 C06 *江口和洋(九大院・理・生物)・勝野陽子(ふくおか湿地保全研究会). あずまやはちよと東向きがしい
- 10:30~10:45 C07 *高野茂樹(熊本大・自然)・逸見泰久(熊本大・沿岸域センター). 八代海におけるクロツラヘラサギの採餌生態
- 10:45~11:00 C08 小島太一(熊本大・自然)・*逸見泰久(熊本大・沿岸域センター). ハクセンシオマネキの再生した巨大ハサミは、偽のシグナルか？
- 11:00~11:15 C09 *橋口真大・山口純平(熊本大・自然)・逸見泰久(熊本大・沿岸域センター). 有明海におけるハマグリに着底・成長・移動
- 11:15~11:30 C10 *山口純平・橋口真大(熊本大・自然)・逸見泰久(熊本大・沿岸域センター). ナメジウオの生活史—天草と島原の比較—
- 11:30~11:45 C11 瀬戸口友佳(熊本大・自然)・*嶋永元裕(熊本大・沿岸域センター). 海底火山(明神海丘)の熱水域・非熱水域における線虫類群集の空間変異

特別公開講演

5月18日(土) 16:20~17:50

熊本大学 黒髪キャンパス

理学部3号館2階 D201号室

講演者

杉浦直人氏(熊本大・院・自然科学)

瀬井純雄氏(NPO法人阿蘇花野協会)



Fascination of
Plants Day
May 18th 2013

国際植物の日

世界のみんなで植物のたいせつさを考える日

本特別公開講演は、Fascination of Plants Day (国際植物の日)参加イベントです。

特別公開講演要旨

阿蘇の半草原に生育するカキラン(ラン科)の受粉生態について

杉浦 直人 (熊本大・院・自然科学)

被子植物 20 数万種のうち、アリによって花粉が媒介されることが実証された研究事例は 20 種にも満たないとされる。“アリ媒花”が稀な理由として、これまでいくつかの仮説が提唱されているが、現在最も支持されているのは「アリ体表に存在する外分泌腺由来の化学物質(mymicacin)が付着花粉の発芽等に悪影響を及ぼすため」という仮説である(Beattie, 1985)。

カキラン *Epipactis thunbergii* A.Gray は、湿原などの湿った場所に生える地生ランの 1 種で、花被片がカキの実に似た赤みを帯びた黄色であることからその名がついたとされる。本種は花蜜や花粉を求めて訪れる小型のハナアブ類(主にヒメハナアブ類 *Sphaerophoria* spp.) によって花粉が媒介される“ハナアブ媒植物”で、その花にはアブの体を蕊柱(column) 先端の葯や柱頭に押し付けるための特殊なしくみが備わっているなど形態的な特殊化が認められ(Sugiura, 1996)、ハナアブ媒に高度に適応した種と考えられる。

阿蘇地方の半自然草原では、乾いた場所にもカキランがごく普通に生育している。そこでは本来の花粉媒介者であるハナアブ類に加えて、クロオオアリ *Camponotus japonicus* も花を訪れる。本講演では、ハナアブ類に対して形態的に特化したカキランの花において、クロオオアリがその花粉媒介に貢献しているのか否かを調べた調査結果(Sugiura et al, 2006) について紹介し、昆虫との関わりを通じて進化してきた“花のかたち”の意味を追究することの面白さを伝えたい。

阿蘇の草原植物の現状と草原再生

瀬井 純雄 (NPO 法人 阿蘇花野協会)

阿蘇の草原には、ハナシノブやツクシマツモト、ツクシトラノオ、ツクシクガイノウ、ケルリソウ、チョウセンカメシソウ、タマボウキなど、国内では阿蘇だけに自生する貴重な植物が数多く生育していて、希少種が集中するホットスポットの一つとなっている。

阿蘇の草原植物は、採草や野焼きなどの人々の営みと自然の力が釣り合った形で維持されてきた半自然の草原が主な生育地である。この草原は、昭和 40 年代頃まで農業の基盤として不可欠のものであり、農村の暮らしと深く結びついて長年にわたって維持されてきた。しかし、農業の近代化による機械化や化学肥料の利用、畜産業の低迷などによってその存在価値が減少し、草原の存在そのものが風前の灯火の状態になっている。草原が失われることで、阿蘇の草原植物は生きるための場所を失い絶滅の危機に追い込まれている。

このような状況の中、消えゆく阿蘇の草原植物を未来に引き継ぐため、平成 16 年 NPO 法人「阿蘇花野協会」を設立した。そして、平成 18 年 10 月には、日本ナショナル・トラスト協会および自然保護助成基金の支援によって阿蘇郡高森町の約 10ha の土地を取得した。ここには「種の保存法」により特定国内希少野生動植物種に指定されているハナシノブをはじめ、ツクシマツモト、ツクシトラノオ、ツクシクガイノウ、ハナカズラなど 20 種を超える絶滅危惧植物が自生し、ヒメシロチョウやゴマシジミなど国内他地域では絶滅寸前の草原性の蝶たちも多数生息していた。しかし、杉や檜の植林地となったり、草原としての維持管理が 20 年以上放棄されて藪化したりして、草原植物はほとんど見られなくなっていた。

平成 16 年 3 月以降、「阿蘇花野再生プロジェクト」と名づけて、防火線づくりや野焼き、草刈り、草集めなど、昔ながらの維持管理作業だけを会員のボランティアで毎年行って、放棄地をもとの草原に再生してきた。その結果、短期間の間にユウスゲやツクシマツモト、ヒメユリなどが群生する生物多様性豊かな草原「花野」が再生した。

また、平成 22 年 9 月からは、三井物産環境基金の支援により「阿蘇花野再生プロジェクトステップⅡ～放置人工林伐採による生物多様性豊かな草原の再生～」の事業を進めている。この事業では、約 40 年前に植林された杉の人工林をもとの草原に再生するため平成 23 年 11 月に全伐採を行った。その結果、平成 24 年 8 月には、伐採跡地に絶滅危惧植物であるツクシトラノオやゴマハグサ、ケルリソウ、シオン、アソタカラコウなどが 1 年目にして復活し、植物の持つ不思議な生命力に驚かされている。